

かささぎ 通信 第44号

2016年4月8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年三月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年6月号初出の三作品を読みました。『運動会』『竹ようかん』『ワップル焼』

今回読んだ『赤い鳥』昭和9年6月号には森三郎の作品が三作品載っていました。

「運動会」は森三郎、「竹ようかん」は栗野俊、「ワップル焼」は小松淑郎の名義です。栗野俊の作品はこの一作のみ、小松淑郎の作品はこの後、三作で計四作です。これまでも同じ号に複数の作品が掲載されていましたが、毎号複数の作品を別の名義で創作するにあたっては、どのような観点で作品の性格を変えているのだろうかと思ってきました。しかし、今号の三作のタイトルを見てみると、むしろ、作者森三郎は初めに共通の小道具をイメージして、それからそれぞれのストーリーを描いているのではないかと思ってきました。

「竹ようかん」「ワップル焼」は見ての通り、お菓子の名前です。それだけでなく「運動会」には「さとうきび」がでてきます。

「竹ようかん」は今でこそ一本当たり約三百円から五百円という高級和菓子ですが、この作品に出てくる竹ようかんは、お祭りや縁日で売られる青竹の筒につめられた水ようかんです。主人公の「私」の父は縁日でこの竹ようかんを売っているのですが一本一銭ですから、もうけはしれていて、家は貧しいので新しい学用品などなかなか買ってもらえません。「私」は村のお祭りの時には父と並んで、竹ようかんを売る手伝いをするような子どもです。でも、友達がいままで新しい筆を買ってもらえないことを馬鹿にしたような顔をするやばり、自分の家の貧乏なことが、くやしくてならなくなります。

「ワップル焼」は、「一度ワップル焼を腹いっぱい食べてみたいな」と思っている、呉服屋に奉公している十三歳の乙吉の話です。乙吉は屋台のワップル焼のじいさんの手順をしつかり覚えていて、メリケン粉を型に注ぎ込むところから、焼ける時のいい匂い、ぶつぶつ泡がたち、狐色に焦げていく様子、竹のへらで黒あんを落とすまでの過程を、目をつぶっていても思い描くことができるのです。ワップル焼は一つ一銭です。ある時番頭さんからせつかく五銭をもらうのに、運悪く、そのワップル焼を手にすることができず、またも「あゝあ、ワップル焼が腹いっぱいいたべたいなあ。」と思うのです。

一本一銭の「竹ようかん」は貧しさの象徴であり、同じく一つ一銭の「ワップル焼」は貧しさの中で抱くあこがれの対象です。

そのようなせつなさは、「運動会」に出てくる「さとうきび」にも感じられます。主人公の道也の家のばあやは、秋になると家へ帰ってさとうきびを持ってきてくれたものでした。ばあやはわけあって暇を出され、隣の自分の家へ帰るのですが、道也に会いたくて、道也が隣の小学校での合同運動会に来たチャンスを見逃さずに会いに来るのです。この時も、朝、畑から取ったばかりのさとうきびを一節一節に切って新聞紙に包み、持ってきてくれました。ばあやにとっては、小さかった時の道也との思い出をつなぐものは、このさとうきびだったのでしよう。でも道也が運動会で楽しみにしていたのは、隣町に引越して行った仲良しの秋ちゃんとの再会でした。ところが秋ちゃんは新しい学校での生活に慣れていて、かつての秋ちゃんではなかったのです。時間と所が変わって、人と人とのつながりにも少しずつ変化が生じることを道也も感じたのでしよう。「ばあや、さようなら。」と心で言っていて、話は終わっています。森三郎さんは、こういう体験から子どもたちが成長していくことを伝えたかったのでしよう。

一次回予定 平成28年5月13日(金)午後1時〜3時

『赤い鳥』昭和9年8月号初出作品「コム人形」「繪」「まほう塚」